昭和六二年六月一日発行（毎月一日発行）
三〇号 発行／黒埼町役場 〒950-21 新潟県西蒲原郡黒埼町大野二六四一
電話／〇二五七-七-三〇二一 編集／企画開発課（担当：広報統計係） 印刷／三盛舘株式会社 総費六〇円

人 それを人生という 26

一年間の農業留学。外国人も同じ、あたりまえのことが見えてきた。

青木（あおき） 博（ひろし）さん
木場 24歳

「顔が真っ黒、帰りのホノルル空港ではフィリピン人と間違われました」と笑う青木博さんは、三月末にハワイから一年間の農業留学を終えて帰国した。これは国際農友会が農業実習生海外派遣事業として、アメリカやヨーロッパなどへ全国の農業青年を毎年四十人ほど留学させているもの。

「高校（興農館）のころから一度は海外に行ってみたいと思っていたし、農業だけでなく、社会勉強にもなるだろうと。今しかないと申し込みました」。経費は約二十万円。現地で実習生として働くため費用は少なくてすむ。言葉の壁も「なんとかなるだろう」と昨年三月十六日、日本を発った。

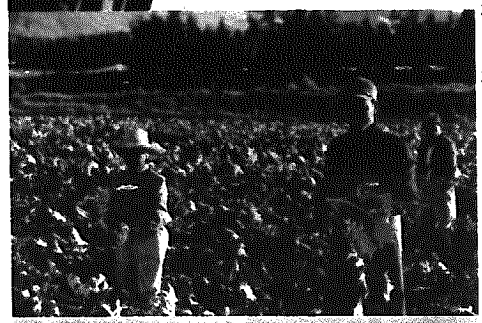
留学先はハワイのハワイ島。ハワイ島はホノルルやワイキキ海岸で有名なオアフ島とは違い、牧場やサトウキビ、野菜畑が中心の島だ。そこで日系二世のヒラコウ氏が経営する農場で暮らすことになった。心強いことに南蒲原郡栄町の実習生も一緒だった。

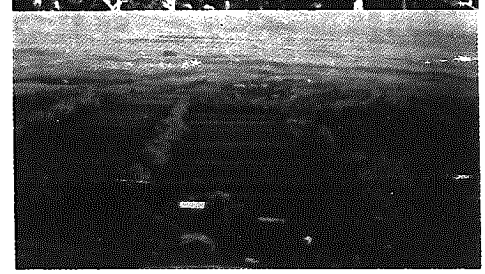
「そこは四十㌶の農場で野菜を作っているんです。白菜、レタス、セロリ…、ほとんど日本と同じです。質も日本のものに劣りません。ただ、作り方はだいぶ違いますね。広いからおおざっぱです」。日本の農業とのいちばんの違いは適地適作が徹底していること。

「標高が八百㍍ほどの高原です。日本でも高原野菜を作っていると同じですね。そこの土地にはその土地に合った方法で、合う作物を作るようです」。

農場では青木さんは雇われているフィリピン出身者と一緒に働いた。夏で朝五時半から三時ごろまで、遅いときは六時。それでも、一日八時間労働が守られているそうだ。島には日系人やアメリカ人のほか、アジアや南米などのさまざまな人がいた。「なに人かは関係ないですね。いろんな人と接してみて、外国人が日本人より偉いわけでもないし、劣っているわけでもない。みんな同じですよ。あたりまえのことなんですけど、それを肌で感じたことが、最大の収穫でした」。

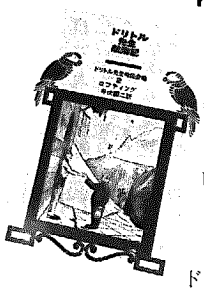
日本に応用できる農業技術はあまりないという。しかし「これから先の人生に少しずつこの体験が生きてくる」。日焼けした腕を組んでそう言った。





上/これからの人生勉強になったという青木さん
中/農業実習で、ブロッコリーのとり入れ
下/1年間暮らしたハワイ島の山すそに広がる農場

ほんの一冊



ドリトル先生航海記
（岩波書店）
ヒュー・ロフティング
（井伏鱒二訳）

ドリトル先生物語については何も言うことがないくらい世界中の子供に愛されている本です。小学校の図書館から借りて、大人になって全集を買う人も多いと聞きます。物語は動物語が話せるドリトル先生とオウムのポリネシア、アヒルのダブダブたちの冒険とユーモアに満ちたものです。この航海記はシリーズ12巻中の最高傑作。挿絵もすばらしく、装丁も実に立派な本です。しかも、訳者はあの井伏鱒二なのです。

（紹介者：五十嵐政人）※あなたの本の一冊を紹介してくれませんか。図書券進程。

〈人の動き〉

4月末日現在	（前月比）	〔前年同月比〕
人口	22,175	（＋ 3）〔＋ 360〕
男	10,879	（－ 2）〔＋ 163〕
女	11,296	（＋ 5）〔＋ 197〕
世帯	5,768	（＋11）〔＋ 92〕

3月1日～末日

出生	25	転入	108
婚姻	18	転出	115
死亡	13		

文化というのはまるでよくわからない。わからないが、なにはなくとも文化である。なにはなくとも、ここが肝心なところだ。生活や仕事や時間に余裕があるから文化なのではない。そういうのは文化的という。文化とはもっと強烈で、ときには暗くて、おうおうにしてしたたかであったりする。ときに、人はつい「文化」と口にしたとき、どこか恥ずかしさを感じるものだ。まだ、この国においては文化は恥ずかしいものなのである。そう、恥ずかし気もなく「文化」と言えるとき文化的にサヨナラし文化の時代と言えるのではないか。文化、文化と書いてどうにも恥ずかしい次第である。と書いて恥の上塗りになってしまった。文化の上すべりをしてしまった今月号の広報という気がしないでもない。何の脈絡もなく言わせてもらえば、文化は風刺である。

●今号の表紙

このスタイルにしてからウケている。始めたときはすぐやめようかと思った。「どんな人が載るのか毎号ドキドキしています」と言われるとこちらは内心ハラハラする。取材の申し込みがないのね。「悪いようにはしませんから」が取材の決まり文句である。来号、頼みます。

さて、文化と彫っていただいたのは、十二ページの西原先生。ありがとうございました。西潟さんは「絵は描いているというより楽しんでいる」そうだ。「楽しくなければ」と小幡さんも宮川さんも言う。七十歳の樋口さんと十七歳の鷲尾君は「これからだ」と気力充実だ。高橋さんは「手話は技術が未熟でも気持ちが伝わるが、ワープロは気持ちまで伝えてくれないのでは」と話す。

なお、「文化のために」などの文字はそれぞれのかたに書いてもらった。

●来号の表紙

21世紀の黒埼町がテーマです。あなたのお考えをお寄せください。